

世界遺産を活用した観光振興のあり方に関する研究

小室 充弘 主任研究員

1. 研究の背景と目的

観光立国の実現が重要な政策課題となる中で、地域固有の観光資源を活かした魅力ある観光地づくりが求められている。

こうした観光資源として、ユネスコの世界遺産が注目を集めるようになってきている。

富士山などの最近の事例を見る限り、登録前後は観光客が増加している。

しかしながら、世界遺産登録が長期的に観光振興を通じた地域の活性化に寄与しているかについては疑問点が存在する。

また、世界遺産登録の本来の目的は遺産保全にあるが、観光客の増加により遺産保全に支障が生じていないかも懸念される。

本研究では、こうした問題意識を踏まえ、

①世界遺産と観光の関係の明確化

(遺産登録後の観光動向、地域に及ぼした影響、地方自治体、観光客等の意見など)

②世界遺産観光に係る課題事項の抽出

③世界遺産を活用した持続的な観光振興のあり方についての検討

を行うものである。

2. 世界遺産の類型化と研究対象の絞り込み

17件の世界遺産（自然遺産4件、文化遺産13件）を先行研究に従い登録後の観光客数の変化により3類型に分類した。

A. 登録後に急増（屋久島、白神山地、白川郷、紀伊山地の霊場・参詣道、石見銀山等）登録後に全国的な観光地として確立

B. 登録後も堅調に推移又は下げ止まり（京都奈良、日光）従来からの著名な観光地で広域に点在。

C. 登録にもかかわらず減少（法隆寺、姫路城、厳島神社、原爆ドーム、知床）従来からの著名な観光地で、知床を除き単独で存在。

本研究の趣旨に照らし、Aタイプの世界遺産を対象に研究を進めることとした。

3. 世界遺産登録と観光の関係

1) 文献調査

Aタイプの世界遺産（5件）について、

登録後の観光客数の推移、観光の実態（観光客の属性、旅行形態）、外国人観光客の動向、観光が地域に及ぼした影響について整理した。

全ての遺産で観光客数は長期的には増加から減少傾向に転じていた。特定スポットに観光客が集中する傾向も確認された。滞在時間については宿泊型と通過型に分かれる。

屋久島、白川郷及び石見銀山では観光と遺産保全との間でシリアスな問題が生じていた。

2) ヒアリング

石見銀山（文化遺産・通過型）と屋久島（自然遺産・宿泊型）を選び、地方自治体等を対象に①登録後の観光動向の詳細②観光振興に向けた取組み（誘致・受入、観光と遺産保全との調和）についてヒアリングを行った。

その結果、①観光客の減少は、域内路線バスの廃止や高速船の値上げ等によるもので、観光地との魅力低下ではないと認識している②観光振興は、地元市町が主体となって県が支援する体制であり、石見銀山では観光地のネットワーク化等の戦略的な取組みも一部進めている③世界遺産（環境）保全に支障が生じないような観光振興策（滞在時間延長等）が重要と考えている等の確認が得られた。

3) まとめ

観光地のライフサイクル論を踏まえると、Aタイプの世界遺産は、戦略的な観光振興による観光需要の確保（ファーストカマーの獲得とリピーター育成）が必要ではないかと考えられる。また、世界遺産の保全は国際的な責務であり、観光振興により遺産保全に支障が生じないよう最大限の配慮が求められる。

4. 今後の進め方

上記の認識を踏まえ、石見銀山、屋久島の関係者等への追加ヒアリングを実施する。

また、観光客意識調査、旅行業界等へのヒアリング、有識者へのインタビュー等を進め、世界遺産観光に係る課題事項を抽出する。